

講演Ⅱ 福祉の学び，福祉の実践，そして地方行政(久留米大学文学部社会福祉学科開設記念講演会(記録))

| | |
|-----|---|
| 著者 | 潮谷 義子 |
| 雑誌名 | 久留米大学文学部紀要．社会福祉学科編 |
| 巻 | 1/2 |
| ページ | 99-107 |
| 発行年 | 2001-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/11316/665 |

講演Ⅱ

福祉の学び、福祉の実践、そして地方行政

潮谷義子先生

1. ライフワークとしての「福祉」
 - ・「志」の動機と変化
 して上げる→してみたい→する
 - ・1958年～1962年の日本社会事業大学と私
2. 気付きは遅く、しかも今も深く私に存在する恩師群の影響
 - ・理論と実践の育み
 カリキュラム、 学生の頭脳、感性、胃袋
 まで満たす教育実践
 - ・ケース事例に学ぶ
 - ・出会いのすばらしさ
3. 副知事、そして知事へ
4. 政策の視点と福祉観
 （当日パンフレットから）

はじめに

こんにちは。私は第一部のところを遅れて伺ったのですが、ある意味では遅れて良かったのではないかと感じております。今、仲村先生のお話の中で、理事長、学長、文学部長の先生方のお言葉の引用がありました。そうした言葉を直接耳にいたしましたならば、もう話さない方がいいという気持ちになったのではないかと思います。

まず、最初の学科教員代表のお話の中で、久留米大学社会福祉学科の特色というのは福祉哲学を持たなければならないということ、あるいは福祉科学の追求が必要であるということ、その2点をお聞きしましたときに、私はこれまでの社会福祉というものが学問的な領域の中でここまでたどり着いたという思いをひしひしとさせられたところでございます。

社会福祉という領域の中には哲学が必要であり、社会福祉の科学性が求められなければならないということは、まさに私の挙げた項目の中で言いますと「気づきは遅く、しかし今も深く私に存在する恩師群の影響」ということで、振り返った時に何を残し

てくださっていたかということと関連して2項目を鮮やかにたどることができるのです。学問領域の中ではすでにそうしたものが福祉学科の目標に設定されているということで、やはり時代の流れ、学問の流れというのは素晴らしいものがあると、そんな感じを受けたところでございます。

そしてもう一つ、非常に新鮮でしかも一番大事なことがなされていまして。それは当事者参加ということで、私は社会福祉の領域の中で大事な部分だと以前から申し上げてまいりましたし、大事にしてきました。この社会福祉学科の改革開会式とでも申しましょうか、そこに当事者参加があった。しかも6人のみなさんたちがゼミを通してこの7ヶ月間の感想と展望に触れられました。その質の高さは、とりもなおさず学生のみなさんたちにかかわりをお持ちになっていらっしゃるゼミの先生方の質の高さの裏返しであるという感じがいたします。

控え室で仲村先生と二人で、「もうお話ししないでもいいような気がする」と確認したところですけれども、それでも若い皆さま方に私がどんな学びをしたのか、そしてそれがどんなに素晴らしいものであったかという事をお伝えしたいし、そしてどうしてもっと1年生の時から耳を傾けなかったのだろうという残念さが今もなお残っているという思いをお話しさせていただこうと思っています。

福祉への「志」

これはゼミの学生さんのどなたかの言葉の中にもありましたが、私は中学生の時に読みましたシュバイツァーの伝記に大変憧れまして、社会福祉ということとはわからなくて慈善という領域の中で、シュバイツァーの才能あるいはシュバイツァーの生き方、あるいはシュバイツァーの哲学性、そのようなことは論外の話なのですが、思春期の中でその美しい行為に胸を打たれ、そして自分もそういった中に身を置きたいという漠然とした思いがありました。そして高校3年生の時に、将来どういう職に就きたいかという地元新聞のインタビューがあって私は捉えどころのない話をしたわけですが、それをお読みくださった佐賀県社会福祉協議会の方が、こういう大学があるということで日本社会事業大学と大阪の社会事業大学の紹介をしてくださいました。大阪

社会事業大学は二年制の大学で、これはやがて府立大に吸収されていく訳ですが、私の時にはまだ二年制で、佐賀県は奨学金を出したいからできれば四年制の大学で学んでほしいということもあり、私は日本社会事業大学へ参りました。

ところが、木田哲郎先生と言われる先生がいらっしやいまして、この先生の最初の授業で、「社会事業と慈善は違う」という言葉を聞いただけで私は頭の中が真っ白になりました。「学校の選択を間違えた」と思い、私は保証人となってくれた親類が早稲田大学のすぐ前でセイブンドウという書店を開いているのですが、そこに走り込みまして「もう大学を辞めようと思う。やっぱり地元に戻りたい」と言いました。大変貧しい中で進学をしたものですから帰りたいというふうに言いましたら、「帰るのはいつだって帰れるのだからもうしばらく頑張ってみたらどうか」となだめすかされて大学に残りました。

私の動機の中には「こういう仕事をしてみたい」という漠然としたものがあり、その気持ちは学びを通して「誰かに何かをしてあげたい。社会のために何か私はしてあげたい。してあげる」という形でずっと考えてきました。それはやがて私の中で、何かを私たちがするという事の中では、本当にしてあげたいとかしてみたい、あるいは本当にこんなふうであればいいという決心に入ったときに、理論性の問題と自分の中に学ぶということの追求、なぜそうしたいかという動機性との問題がいつも追及されてこなければならぬのではないかと、そのようなことをこの学校を通して学んだわけです。

日本社会事業大学の基礎教育

1958年から62年の日本社会事業大学の状況は先ほど仲村先生が触れられましたので私はあえて深く触れようとは思いませんが、日本全体もまだ貧しさの中にあって高度成長というようなものからまだちょっと下がったところにあり、福祉というものの一番根幹に座っていたのは生活保護法でした。現在、社会福祉六法、八法の改正、公的扶助だけが残された形の中での改正ということを経験しているわけですが、そういった点で私どもの時代というのは、大きな差があったという感じがしております。その社大時代を振り返って考えてみますと、実は昨日夫

と話をしていたのですが、私たちは大学の中で基礎教育という点でレベルの高い教育を受けてきたのではないかという感じがいたします。私たちが学んだ時と今とは、先ほども申しましたように時代的に大きな変革ということを経験しております。経済的な状況も人の生き方の問題も、あるいは政策論の中で社会保障ということを考えてときに、その変遷はめまぐるしいものがあります。

では、私どもがかつて学んだ教育が、そうした時代性や歴史性や社会保障の変遷の中で対応しがいなものであったのかということを考えてときに、私は改めて大学に感謝をするのです。それは、基礎教育がしっかりとしていたからどんな時代の中でもどんな社会福祉の、社会保障の、あるいは社会事業と呼ばれる初期的な形態の中であったにしても、そのときそのときに真向かうことができたという感じが非常にしているからです。それは専門領域の人たちから見ればレベル的にはいささか低いという所しりもあるかもしれませんが、私はそういった時代の中にも対応できる基礎を育てていただいたということで非常に大事なものを得たと感じているところです。

そしてその4年間、基礎教育の中で何が私の中に息づいていたかということ、一つは先生方ご自身、特に仲村先生がそうであったような気がいたしますし、先生は「いや、僕はそんな態度ではなかった」と言われるかもしれませんが、私の中に存在する仲村先生の授業風景というのは、先生は自分の価値観を押し付けることはなかったということに気づくのです。先生が私たちに教えてくださったもの、それは非常に学問であったという気がいたします。その価値観というのは、それぞれの人格やそれぞれの人生を歩んできた中で育まれてきたものを生かしていきなさいと、私が教えたことに対してあなた自身が自分の価値観を投入して、そしてそれを展開するのですよというメッセージがあったと私はこの年になって考えるのです。そしてこの基礎教育という中で、先生方の専門領域は違っていても、ソーシャルワーカーとしての視点ということが社会事業大学の底流としてあったということも感じるのです。

率直に申し上げまして、今、社会福祉にかかわる大学がいろんなところでできております。その成り立ち、あるいは目的のみますと、そのことによって

学校が経営的に打開されていくとか、少子高齢社会の中で学生を呼び込むためといった設立動機が時として感じられる場合がございますが、動機は何であれ、設立されますとその学校のカラーが非常に大事になっていくのではないかと思います。おそらく社会福祉学科がこの久留米大学の中に生まれたということは、どんな社会福祉の従事者、人間像を育てていくか、保健・福祉・医療が教育の中にどう統合されるかという模索をされていかれるのではないかと想像しているところです。

ソーシャルワーカーの視点

私が社大の中でそのカラーについて考えますと、いろんな意味でソーシャルワーカーとしての基盤を学生の中に作っていきたいというものがあつたのではないかという気がいたします。先生方は一生懸命勉強なさっていらっしゃいました。そしてそれを私たちにぶつけてくださった。常勤でおいでになってくださる先生たちもものすごく質の高い先生方がおいでになられて、その先生方もまた自分の専門領域を一生懸命私たちに伝えてくださいました。そして、先生が持っていいらっしゃる人格的な陶冶というようなものが私たちの基礎に非常に影響を与えてきたという感じがしてならないのです。

そういうソーシャルワーカーという観点の中で振り返ったときに、何をその中から得たのかということが問われてまいります。そのいくつかを代表的に申し上げますと、心理学の先生を通していろいろな心理学を学んだわけですが、それは今考えると福祉のカウンセラー的な役割、そうした素地を作ってくれていました。もう一つは、権利の代弁者としての役割、これを私たちが果たしていくことの大事さ、それから社会資源を含んで幅広く人と社会環境との調整を社会全体として捉えていくときに、そしてその人が生きていくということを考えたときに必要であるということを先生たちは学ばせてくれたという感じがいたします。そして福祉哲学を持つことの大事さがわかったと思います。

今日、大学の中の資格として社会福祉士、介護福祉士あるいは精神保健にかかわる福祉士というような形で資格がたくさん取れるようになりました。でも、私は思うのです。資格は資格に過ぎない、紙の

上に書かれているものが証明するのだろうか。むしろそうではなくて、その資格を習得するまでのプロセス、そこにこそ意味合いがあるのではないかと。私の出ました母校、先ほど仲村先生のお話の中にもありましたけれども、研究科は全国の中で社会福祉士の受験合格率トップを走っております。当初、社会福祉士の資格は、落とすための試験問題を作っているのではないと言われるほど非常に難度の高いものでした。そうした中にありましても、レベルの高いものをパーセンテージとして示しております。それはそれとして決して私は否定するものではありません。しかし、何のために社会福祉士という資格を取り、あるいは介護福祉士という資格を取り、新たな精神保健領域の中の資格を取るのか、その資格に値する自分自身の人間的な証明があるということ胸を張って言える、これが大事な部分ではないかと考えるわけです。今後、学生の皆さんが資格を取られるときに、その資格に合格することも大事ですが、自分の中にヒューマンネットワークにかかわるサービスの担い手として自分がどのようなものを吸収したからこの資格を得たのか、あるいはこの資格を手に入れようとしているか、そうした追求の仕方はすごく大事なのではないかと私は感じているところです。

実習と理論の対峙

それから社大の中で振り返って考えますと、ソーシャルワーカーとしての視点の養いの一つに実習があつたと思います。幅広く社会資源を含んで人と社会環境の調整が必要ということを認識させられたと先ほど申し上げましたが、その一つのきっかけは社会調査であつたと思います。1ヶ月近く現地に足を運び入れまして、私は青森に参りましたけれども、言葉が通じない中で何を人間交流の手段にしていくのかということも含めて、この実習は非常に学ぶものが多かったのです。そして休みが削られるという状況がありましたが、それでもなお私たちは嬉々としてそういったものにかかわってきました。そして福祉事務所の実習です。冒頭に申し上げましたように当時の福祉の根幹となった大きな役割は公的扶助です。福祉事務所に行き、生活者がいる実態をしつかりと見たわけですから。ズルさや凄さ、あるいはひた

すらにそのスティグマと自らが思う生活保護を自覚しているような方、逆に生活保護はスティグマではなく権利だと捉えている人たち、公的扶助という同じ国の政策の中でも人々の反応は違い、その中で人々はどのような生活をしているのか、私たちがかわりを持つときにはどのような視点を持つことが必要であるかということを実習の中で知らされました。

例えば、保育資格の一つ取るにいたしましても、保育所の実習、幼稚園実習だけではなかったのです。その当時には、子どもたちがどのような栄養を摂る必要があるのかということで、香川綾さんの大学では、調理の実習と栄養所要量の計算、食事箋を作る、そこまでやっていたわけです。非常にすごいことがやられていたのだと、そのような感じがするわけです。

そして、その集大成の中で、実習を通して理論と対峙させられる経験もいたしました。今でこそ理論と対峙するという言葉で一括りに表現しておりますが、どうしようもない“あがき”のようなものを感じ取っておりました。それが歩みの中でどのような形で整理されていったかと申しますと、私は福祉の中でも生活保護にかかわりを持っていく中で、法学で習いました憲法25条生存権の保障、叩き込まれるような形で生存権を保障することの大事さを学んだのですが、もう一つ忘れてならない所がありますのが憲法13条に論評を持つことの大事さだったのです。憲法13条は、「すべて国民は個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」というものです。「すべて国民は個人として尊重される」という憲法25条と憲法13条というのは、現場に入ったときに、これを教えてくださった小川政亮先生に感謝をいたしました。

生活保護法の中では裁量権という問題があります。弾力運用ということに当面していく、実はこの中で小川政亮先生と仲村優一先生から学んだケースは、公的扶助とケースワークの理論というのがよみがえってまいりました。ケースワークというのは技術論と言われる場合がありますが、私にとって仲村先生から受けたケースワーク論は、実は思想論であったと非常に感じるわけです。弾力運用とか裁量というこ

とにかかわりをもってまいりますと、憲法13条の理念と連動して考えていかなければいけないのではないかと。生存権の保障ということを考えたときに、生活保護法は最低の生存権の保障ということを法的な理念の中でやっております。しかし、弾力運用というところでなぜ裁量権が一人ひとりの中に問われているかということと考えますと、仲村先生ご自身もその裁量権という中にケースワークの理論、それを私たちの生き様あるいは人間性、あるいは福祉哲学と重ね合わせて考えるということ、それを私たちに託されていた感じがいたします。その意味で、先生は私たちにご自身が持っている価値観を押しつけられなかった、そういう感じがしております。そうした中で考えますと、この憲法13条は自己決定と自己実現ということで社会福祉の概念あるいは人の生き方、ニーズが変わってまいりましたときには多様な選択肢が必要となってくると思います。しかし、その根幹に、どんなに時代が変わってもこの2つの憲法条項は福祉の思想性の中に含んでいかなければいけないと感じているところです。

それから、仲村先生を筆頭として、どの先生の授業にも豊かな柔軟性があったという感じがします。その柔軟性というのは、「私はこう思うけどあなた達はどうだ」というような、学生で未熟な私たちを対等な人間として扱ってくださった、そのような思いが私の中にあります。

私たちは、ライフワークとして動機を持ちながら福祉に出会っていくわけですが、それを高め、さらに方向を決定づけてくださるのはやはり学問の領域であると思いますし、さらにそれを高めていくことが実践、実習といったものであると思います。実習を現場に出る前に学校の中でやってほしいということがありますが、ややもすると実習が軽視されているのではないかと、資格を取らせるためのカリキュラム設定に走りすぎているのではないかとという気がしなくてもありません。私自身も福祉施設の中で仕事をして、傍らで大学の非常勤講師をやってまいりました。大学のありようも自分の体の中で感じてまいりました。だから学生のみなさん方にそうした柔軟性を触れあいの中でどれくらい感じさせることができるか、このへんは大変難しい課題になってきたと思います。「理論は実践に学び、実践は理論に学ぶ」

それを本当に感じます。そしてそれを吸い上げていくところのリカレントの教育というものが今後、この大学の中でも将来的に必要なようになってくるのではないかと、それがないと自分の理論や自分の職責で落とし穴の中にすっぽりと入り込んでいって、自分の実践を良しとしてしまうことが起こりがちになるのではないかと思います。

先生方との出会い

それから、あの当時、大学の先生方は私たちの頭脳と感性と同時に、胃袋までも満たしてくださる存在でした。日本社会事業大学の給料は決して高くなかったと思います。しかし先生方は絶えず私たちの胃袋を満たしてくださって、私などはご自宅にも伺ったりして触れあいの時が得られ、懐かしくて大事で、なんと素晴らしい触れあいの時を与えてくださったのだらうという感じでいっぱいです。そうした先生方に巡り逢えたことを本当に嬉しく思います。どうぞ先生方も学生のみなさまも、振り返ったときに、あんなにすばらしい出会いを経験していたのだということ、一コマコマ作り上げていく学校の気風であってほしいと思います。それは邂逅という形だけではなくて、今、私がここに存在しているということ考えたときの大事な基礎が育まれたということに関連してでございます。

ケース事例に学ぶ

それからケース事例に学ぶということを実践と理論ということの中で出していますけれども、忘れることのできないいくつかのケースがあります。そしてそのケースを通して、私自身の傲慢さというもの、をいつも自分の中に突きつけております。大学を出て、私は佐賀県庁に参りまして福祉事務所の職員として働き始めました。一人暮らしのお年寄りがいらっしゃいました。病気がちでご自身の身のまわりもうまくできない、そういう姿があったのです。家庭訪問をした私はこのお年寄りに、「不自由なので老人施設に行かれた方がいいのではないか」というお話をしました。でもこの方は頑として、「自分は家庭で生活したい」とおっしゃっていました。でも、あるとき火の始末が悪くてボヤを出されたのです。近所の民生委員の方々、そして総務の方々含めて、ちょっ

と心配だというお話があり、離れたところに住まわれていたお子さん呼びまして、お子さんの説得で老人ホームに行かれました。

老人ホームに行かれたとき、もちろん私も同行しましたし、その後も「あの様に嫌な思いで行かれたけれどもどうしていらっしゃるかしら」ということで参りました。その時にお年寄りが私に「ありがとうございました。もっと早く来ればよかった。三食のご飯も食べさせてもらって、お風呂もきちんとして、温かいみそ汁ってこんなにおいしかったんですね」とおっしゃいました。だから私は本当に措置でこうして良かったという思いがあったのです。私の道筋は間違っていなかった、そういう単純さがありました。それから1ヶ月しない間に、このお年寄りは亡くなりました。私は、自己決定に導くということ、このケースの中で学び、大学の中でも学んで参りました。そしてケースの処遇方針の大事さ、これも私たちは叩き込まれてきました。しかしこのケースでは、「ありがとうございます」と私に言いながら、実は生きる希望をなくしていたのではないかと思います。亡くなったお年寄りからそのことを聞く時間は私にはありません。あるがままの生き方、これを受容するということ、そのためにその人が願う自己実現というものを私はどのような思いの中で考えていたのか。もしかしたら一番大事な人間としての共感性ということ、を忘れていたのではないかと、これは今でも私の中にずっと引きずりながら残っていることです。

また、小さな子が虐待を受けて慈愛園乳児ホームに参りました。父親は母親から逃げられ、この子が虐待を重ねるのです。この子の祖母がこの子を抱いて役場に駆け込み、そして私の施設に来たのです。子どもに対しての面会はありませんでした。この母親は別の所にいるという情報を聞きましたが、私は連絡を取りませんでした。この子が中学3年生になったとき、母親が訪ねて参りました。「子どもに会わせてほしい」、そう言いました。私はこの母親に、「あなたは一度だって面会に来なかったじゃないの。就職を目前としたこの時期に来るということは、本当にあなたは母親として会いに来たの。それともこの子はこれから稼ぎ手になると思って来たの」、そう問いました。母親は私に「馬鹿野郎」といいなが

ら面会はしないで帰りました。私は会わせなかった。間違っていたのではないだろうかと、これはずっと私の中でくすぶり続けました。役場の職員の人たちは、「会わせなくてよかった。会わせていたらきっと大変なことになっていた」と言います。この子が高校になった時、「あなたのお母さんが中学3年生の時に会いに来た。でも私はあなたには言わないで、会わせなかった」、そう言いました。その時この子は、「先生、私を信用してなかったんだろう」と言うのです。これはすごくショックでした。そうなのです。選ぶのは本人なのです。それを援助していくのが私たちだったのです。

また、愛情遮断症候群と呼ばれる病名をつけられて、顔貌も体型も筋肉質で大人のような子どもが私の所に入ってまいりました。離婚したケースで、「この子の顔貌は離婚した相手にそっくりで、私はどうしてもこの子を受け入れることはできない」と親が言うのです。でも子どもは親を求めます。私はその事例に対しては面会させるべきだと思っていましたから、何度も写真を送ったり手紙を出して面会を促しました。でも、車で来ても体は車に置いたまま、脚だけが外にあるのです。子どもは車のそばに行き、一生懸命何か話しているのです。この子が15歳の誕生日を迎えるとき、「先生、お母さん会いに来るかな。誕生日忘れてないかな」と何度も何度も言います。私はこの子に、「Aちゃん、15歳っていうのは昔はね」という話の中で、「お母さんはAちゃんを愛してない。そのことはAちゃんだってわかっているのだから少し大人になって考えたらどう？」と言いました。この15歳を前にしたAが何と言ったか。「先生、私のお母さんよ」と言ったのです。切ることのできない親と子の情愛、おそらくAの頭の中にあるのは現実から離れた母親像であったと私は思います。しかし、現実の母親像をこの子がしっかりと見極めない限り、この子は本当の自立はできなかったのです。私どもは経験や体験したことはよくわかります。でも、体験や経験をしなくても、想像で補うことはできます。しかし、想像は想像に過ぎない、現実ではない、そうしたことを私たちは忘れてはいけない側面もあります。

今、学生の皆さんは、学ぶという領域で頭脳に対しての動きやたくさんの教科書があります。ヒュー

マンサービスという福祉の領域の中で、人間の感性と人間だけが持っている姿勢、それは学問でだけで形成されていくものではなく、私たち人類が営々として築いてきた文化的な所載や、あるいは伝統性や四季折々の通過儀礼の中に存在している人との交わり、こうしたものの積み重ねがなければ、本当に求められているサービスにたどり着くことはできないのではないかと。「気づきは遅く」、私自身は今もそのような反省の中にいるということです。

副知事、そして知事へ

しかし、私はこれらのケース事例に学びながら、福祉というものをずっとライフワークにしていきたいという願いを持ってきました。そのような中で1999年の2月26日、前知事から副知事になってほしいという要請があり、1999年3月16日、議会の承認を得ました。大変不思議なことだったのですが、一人の反対者もなく満場一致という中で副知事に就任しました。やがて1年、2000年2月25日、私を副知事に選ばれたその知事は急逝されました。新しい知事がおいでになるまで職務代理者としての役割を果たしていこう、そう決心しておりました。でも、いろんな方からの要請で、知事として選挙で戦わなければならなくなりました。

私は自分から進んで知事で選挙戦をしようとは考えていませんでしたが、パパラッチとはこういうものののかしらと思うほど、朝に夕にいろんなマスコミに追いかけられました。我が家に帰ることができずに友人の家を転々とし、大きな麦わら帽子みたいなものをかぶって出掛けなければいけないほど大変なことでした。秘密のエレベーターを使って副知事室に行く、出るときにも秘書が先に行って誰もいないことを見計らってどこかへ行く、そういう本当にすごい経験をしたのです。私が決心したのは、21世紀の熊本県の計画を立てている最中であったということと、予算の編成をしていたということでありました。熊本県では副知事は一人ですので、すべてのことにかかわりを持たなければならないという状況がありました。1999年2月26日に就任して、2000年の2月25日には知事がいない、そして1999年3月16日議会の承認を得て、2000年の3月15日に私は副知事を辞め、人知で計りがたい思いの中で知事選に参り

ました。

二人目の女性知事を生み出した熊本というのは、ものすごい男女共同参画の先鞭をつけていったのではないかと思います。時間がなくてあまり事例を申し上げることはできませんが一つだけ事例を申し上げると、ある農村地域で、私とは対立候補を応援している息子さんをお持ちの女性がおられました。対立候補の方は農協を地盤として県会議員を経て、参議院を経てといった、選挙上手で右に出る人はいないという人です。私が立候補したときはすでに出遅れていて、潮谷はだめだろうという風潮がものすごくあったわけです。農協の役員をしている息子さんが力強く私の対立候補を応援する。その息子さんの母親と私は会ったこともなかったのですが、自分は頑張るとやるわけです。それを近所の人が見て、「あんたのところのお父さんは、あなたと息子の間に入って困り果ててるよ。いい加減にしたらどうね」と、この母親に言ったのです。するとこの母親は自分の夫に、「あなた、息子に付くつもり？ 私に付くつもり？ もし息子に付いたら私はあなたの老後なんか知らないからね」と言ったというのです。

そのような女性たちが、今、テレビで「潮谷」という名前が放送されたら、「潮谷が何をしたのか」と家事の手をやめてしっかり耳を傾けている、そういう恐ろしい存在に変わってきています。

「創造にあふれ、生命が脈打つくまもと」

私は知事として今、何をやっていこうとしているのかと言いますと、まさに福祉の中で学んだ事、それをそのまま政策課題の中に載せています。福祉とは幅広い領域を含んでいると確信しております。

実は私が知事選に出たとき、「農政がわからない、農業をしたことがないからわからない」、あるいは「女のくせに何がわかるか、よそ者に何ができるか」と、私は佐賀県の生まれなのでそういう批判がありました。そのことごとくに対して私を支持してくださいる人たちが何と言ったかという、「私たち女はよそから嫁に来ている。私たちが役に立たないというのか」というような反論がありました。私自身も、知事を目指そうと思った時にたまたま女であったにすぎない、知事というのは男であっても女であっても、人間としてどのような県政を展開するのか、こ

れが大事であるということを言い続けました。そして選挙の公約の中で政策を述べました。私は最初、農業がわからないということをあまりに言われたものですから、私の農業政策ということで福祉を引っ込めて話をしておりました。しかし、若い青年たちが「県民は何を望んでいるのか」ということで3000名にわたるニーズ調査をやってくれた結果、その第1位は福祉であるという結果が出ました。それが出てきたときに確信して、私は福祉をやりますと声を高らかに言ってまいりました。

その手法として何をやったかと言いますと、「県民こそ県政の中心である」ということです。それは大学で学んだクライアントセンター、対象者中心主義です。それからケースワークの中で本当に大事な部分であります傾聴、それを私の政策の中で対話型の県政という形に変えました。そして福祉を展開していくときに、サービスメニューと自己決定、これが本当に大事になってきます。また相手のニーズをしっかり受け止めるということ、これが大事です。しかし、ニーズに100%公的なレベルの中で応えられるかどうか、それは別問題です。だから情報公開をやりました。県は何をやっているのかわからないということでは困るので、説明責任を果たしていくことをやりました。そうした福祉の手法が、私の知事としての政策の中に息づいています。

最後に、県政の計画の中で私が大きくテーマにしたことは、「創造にあふれ、生命が脈打つくまもと」です。これを21世紀の総合計画のキャッチフレーズにいたしました。なぜこれをテーマにしたのかということ私のお話の終わりにしたいと思います。

私は慈愛園乳児ホームの中でずっと生活をして参りました。医学部の先生がいらっしゃいますならばお気づきの通り、かつては800グラム、1000グラムの子どもたちが助かる率は本当にありませんでした。でも今は助かります。そんな子どもたちが施設に入参ります。入ってくる親たちの背景には、どうして私はこんな子どもを産んでしまったのだろうという自罰性や、ひそんでいた精神障害を引っぱり出す、そういった大変深刻な事例があります。一人の子どもが私の所へ参りました。早産をして生まれた子どもです。1000グラムに満たない赤ちゃんはたくさんの障害を持っていました。ドクターたちは「この子

は自分で喋ることも歩くことも期待はできません。重度です」と言われました。保育士や看護婦、栄養士、来る日も来る日もこの子にかかわりました。病院もリハビリテーション、脳外科、眼科、小児科と、いくつもの病院を回りました。やがて、遅ればせながらではありましたが、寝返りが始まり、ハイハイが始まり、人がたどる発達の筋道を遅れながらも成長してまいりました。私の所の保育士や看護婦、栄養士は、「今の医学はすごいですね」と言い、私もすごいと思います。何と日本の医学や教育は素晴らしいレベルに達したのかと思います。でも、そんなに頑張ってくれた職員の皆さんにも本当にありがとうございました。

もう一つ、医学や科学や教育発展させ、支え続けていたものは何だったのだろうか。重度の障害を持って生まれたその子を預けに来たとき、その母親は「こんな子、社会のお荷物です。役に立たない存在です」と自罰的に言っておりましたが、障害がある子どもたちは社会のお荷物なのでしょうか。役に立たない存在なのでしょうか。そういう子どもの命の一つひとつが医学の領域や科学や教育を押し進めるエネルギーになったのではないか。ドクターやナース、関係者のその命に対する愛おしさ、それが医学や科学や教育を大きなものにレベルアップした根幹のエネルギーだと思うのです。

今日、男性、女性ともども21世紀をと願う男女共同参画社会、それが国や世界のレベルや女性会議の中で言われています。「リ・プロダクティブ・ヘルス・ライツ＝生と生殖、その権利」についての論議は日増しに高まっています。中絶の権利は、産婦人科のドクターたちは中絶の週数をもっと早くから、しかも相手の同意なしにという形で法の整理はされました。でも、私は男性と女性が出会うまで、そこには男性女性の人権と人格の根付いた平等性が求められると思うのです。ひとたび命が体内に宿ったとき、むしろそれを社会の全体的な基盤の中で支えていく基盤づくりこそ大事ではないでしょうか。脳死の問題を言いますと、脳死がもし人の死であるならば、人の命の始まりはどこからと考えればいいのでしょうか。体内に命が宿り脳ができるまでの6週間、そこからが命の始まりであると考えることが大事ではないか、そんな気がしてしょうがないです。

未婚で出産をする、それがあたかも過去の過ちの烙印であるような風潮の中で、生まれ育った家に足を踏み入れる事ができない、そんな辛さがありました。考えますと、どんな命の姿であっても一人ひとりの命が寿がれる、そうした様々な生命が脈打つ熊本、私の願いの中では熊本のみならず社会の大きなうねりとなってほしい。でも未婚の人が子どもを育てる、そこにはまさに人間としての生活をその人の上にどう実現していくのか、その人が願う生き方に対してどう考えていけばいいのかというまなざしが求められて参ります。社会の資源をこの中に活用していく、また私自身が学んできた人と社会との調整、そういったものが脈々としてどんな命でも生きることができるとこの思いをこのフレーズの中に込めました。中学の時に好んで読んだシュバイツァーの伝記の中に、「人は生きようとする命に囲まれて生きていく存在である」とあります。人間だけの命ではなく、私たちを取り囲んでいるすべての多くの命、そこにも目を向けていきたい。そして「その創造にあふれ」というフレーズは、イマジネーションの世界、クリエイティブの世界、そうしたものを一緒に形成していきたいという願いで作りました。

私の中に脈打つもの

福祉で学んだこと、私の体の中にしっかりと福祉を根付かせてくださった仲村先生を中心とした日本社会事業大学で教えてくださった先生方に限りない感謝を抱き続けています。面と向かって「先生、こうしてくださいましたね」とは言えません。しかし、私の総体の中に社大というものがあった、そして知事となりました今もなお私の中に脈打っているものは、福祉をライフワークとする人間の歩み、それが私自身であると思っております。

県政の歩みは大変重いものがあります。皆様方のお手元に私の随想を書かせていただいたものを配っておりますが、神学者のラインホルド・ニーバーは、「変えることのできるものについては、変える勇気を我々に与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受け入れる冷静さを与えたまえ。変えることのできないものと、変えることのできるものを識別する誠の知恵を与えたまえ」と祈っておりますが、まさにそれは私自身の祈りでもあり

ます。

ニーズに応えたい，そう思っても多様なニーズに応えきれないことがたくさんあることを知りました。ボランティア，NPO，その活動を今後ともしっかりと県に根付かせていきたいと考えているところです。

どうぞ学生のみなさん，これから「隣人と共にある，隣人のために何ができるのだろう。隣人と共に

何ができるのだろう」，そういう思いの中で福祉の学びを続けていただきたいと思います。そしてたくさんさんのボランティア活動や実習や実践活動をしていただきたい，たくさんの人と触れ合っていただきたい，人に群れあうそんな自分であってほしいという願いを込めて私の話とさせていただきます。本当にありがとうございました。